

日本野鳥の会大阪支部 第4回オンライン野鳥フォーラム第2部 2022.8.29

榎本佳樹生誕150年記念事業 プレ企画第1弾

榎本佳樹の見た シギ・チドリ

- 1 榎本佳樹とは
- 2 大阪支部の宝「野鳥便覧」
- 3 「野鳥」誌に見る榎本佳樹
- 4 榎本佳樹の見たシギ・チドリ
- 5 生誕150年記念事業について

な や ひとし
担当 納家 仁



大阪住吉浦にて
1936年（昭和11年）12月

野外識別の草分け、伝説の指導者 榎本佳樹 翁

発足当時の大阪支部の探鳥会で、指導者として活躍された榎本佳樹は、当時「鳥学界の至宝」と称されるほど著名な野外鳥学の第一人者でした。

その著書「野鳥便覧上・下」は、野外識別に重点をおいた画期的な野鳥図鑑であり、鳥の全長や翼の長さなどの数値は、現在の鳥類図鑑の多くが野鳥便覧の数値を引用しています。



▲榎本佳樹 (1873年～1945年)

1 榎本佳樹とは

1873年（明治6年）11月5日徳島市生まれ

【幼・少年期】

病弱であったのが、15歳の頃から兄の狩猟について行くようになり、その後一人で郊外に野鳥を見に出かけるようになり脚が丈夫になり健康体に転換。和船漕の稽古をして上手にできるようになり父や兄の釣りに行くときの船頭をするようになり、河口部の干潟にいるシギ・チドリ類やカモ類などの水鳥を近くから観察することに。

当時、鳥の参考書は何もなく、中学校図書室にある英米何れかの国の博物書や百科事典などを借り、英和辞典を引きながら調べたり、野外で見聞したことや兄が採った鳥の測定を記帳したりして鳥類研究を開始。

榎本佳樹とは

【軍人時代】

中学校卒業と同時に徴兵検査を受け「甲種合格」、1894年(明治27年)12月に士官候補生として丸亀部隊歩兵隊入隊。1911年(明治44年)大尉で軍隊を退く。

軍人として澎湖島、台湾本島、満州(日露戦争)、朝鮮東北部などに赴任。台湾、朝鮮、満州等では勤務時間外に、ある程度鳥類研究の機会を得る。独学で英語の読書力の増進に努め、鳥類に関する知識を高めた。

【徳島～高野山～大阪】

1912年(明治45年)1月、徳島に移住。1916年(大正5年)日本鳥学会入会。1917年(大正6年)1月～1933年(昭和8年)3月、高野山中学勤務。この間、農林省の委託を受け近一帯の鳥類調査。退職後に大阪に移住。大阪支部の指導員として活躍。1945年(昭和20年)1月肺炎をわずらい急逝。6月大阪大空襲で都島の自宅が炎上、野鳥便覧の原図や未発表の資料が焼失した。

大阪支部誕生のころ 第2代支部長 藤原廣蔵 記 抜粋

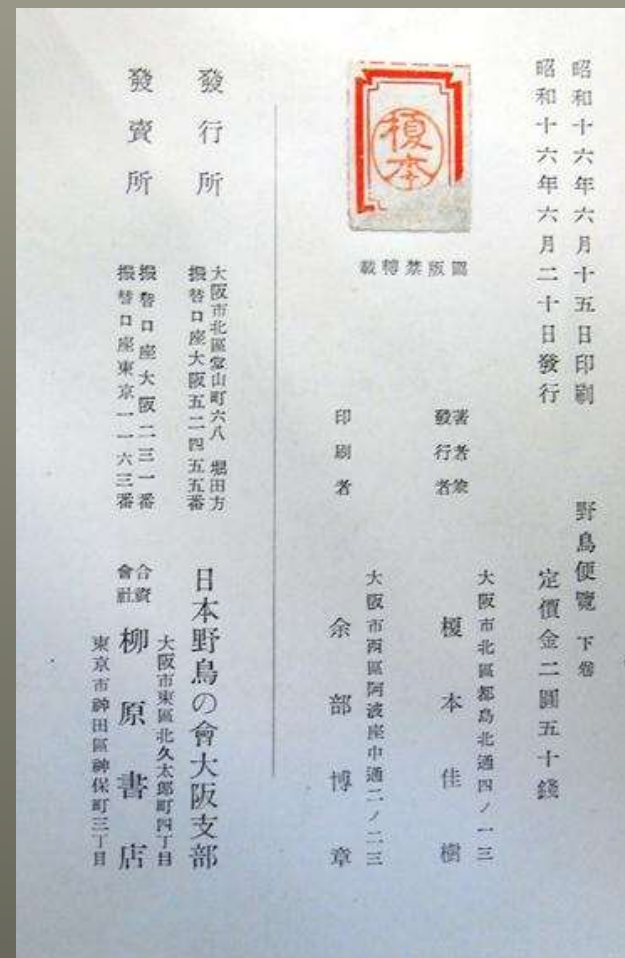
大阪支部が出来てからは実地指導者と云う役割に責任を感じられて、探鳥会には参加を欠かされたことがないばかりでなく、数日前に下調査に出掛けられることが普通であった。

野外では一刻も鳥から注意を外らすことはなく、車中でも常に窓外の鳥影を求めて居られたもこのことは高著「野鳥便覧」上巻に「観察の機会」と云う項目中で「鳥類の中には一度見聞の機会を逸したら、観察者の一生の間に再びそれを見聞することの出来ない様なものも少なくないから常に油断なく注意していて不覚をとらぬ様にせねばならぬ…」とあるのを自ら実行して居られたのである。

鳥類の野外識別については我国の草分けで、普通最も困難とされているシギ、チドリ類、ワシタカ類、海鳥類などの野外識別は先生の最も得意とされるところで、この方面の先駆者である。従って当時、大阪支部の催す淀川、住吉浦などの探鳥会は誠に特色のあるものであった。

※1937(昭和12)年2月19日、日本野鳥の会阪神支部として設立
(昭和14年に神戸支部が分離し、大阪支部と改称)

2 大阪支部の宝「野鳥便覧」



上巻 昭和13年（1938年）、下巻 昭和16年（1941年）に日本野鳥の会大阪支部（上巻は前身の阪神支部）が発行

上巻は初代支部長森田淳一氏が、下巻は藤原廣蔵第2代支部長（当時
は幹事）の全面的な資金援助で発行。発行部数は両巻とも500部。古
書店に出ることもない幻の図鑑である。

美しく正確な図版

●生息環境を背景に



小さく描いたため、細部が表れていなかったり、省略された部分があったりするのやむを得ないことである。しかしながら相当親切に描いたつもりであるから、図画の欠点のため、種類の違ったものに見える様なのは、沢山あるまいと信じている。

●野鳥画としての価値も高い

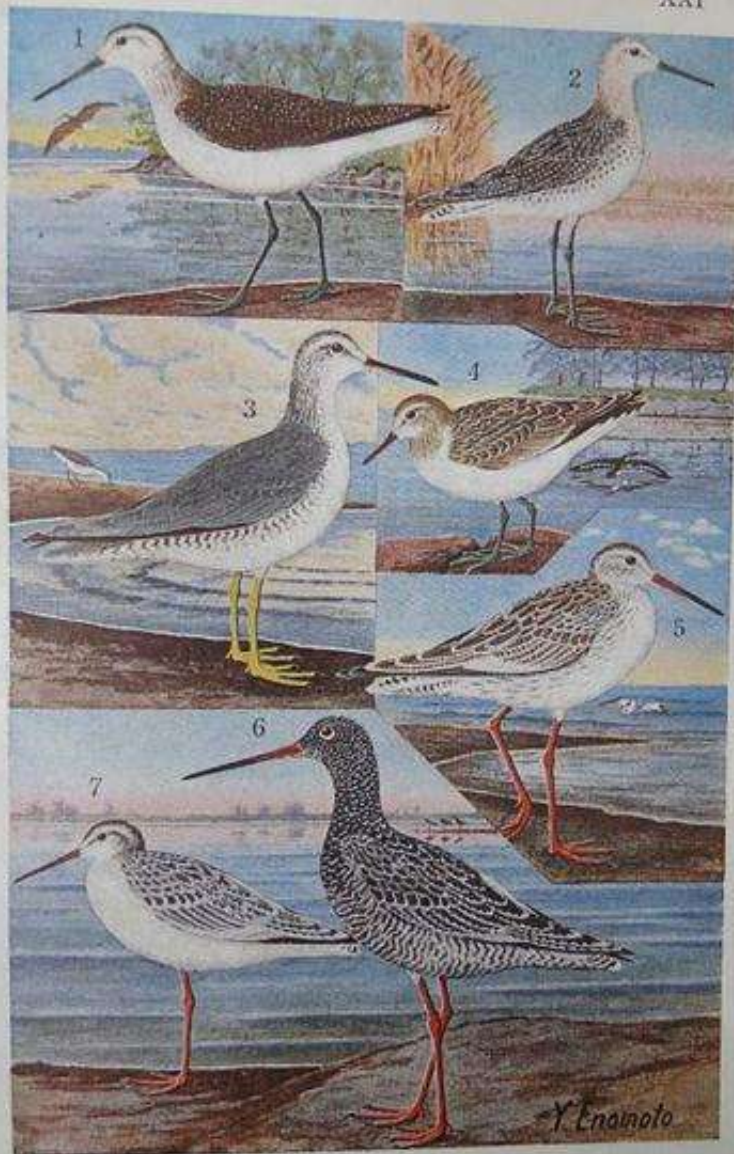
鳥のみを描いた一般的な図版

原色野外鳥類図譜

昭和13年 下村兼史著



XXI



1/5

XXII



1/5



XXV

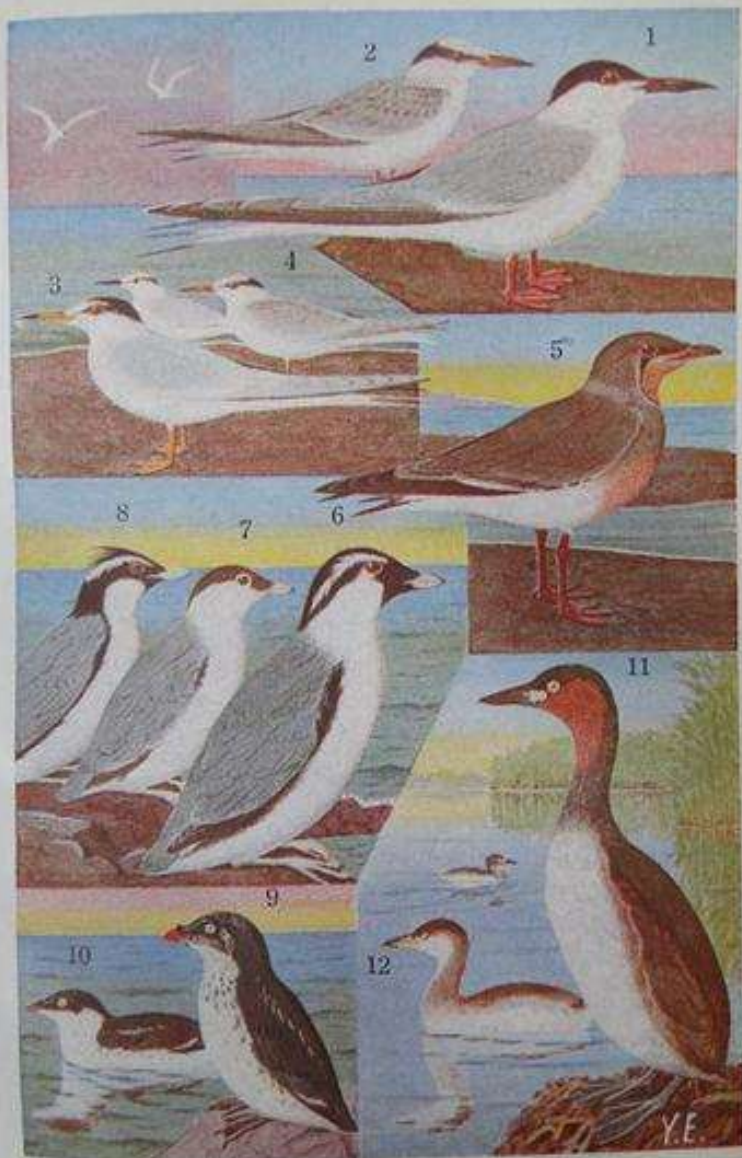


1/5

XXVI



1/5



下巻巻末の日本産主要鳥類測定表

日本産主要鳥類測定表																					
鳥名	全長(耗)			翼長			尾羽長			嘴峰長			跗蹠長			翼開張			體重(毎)		
	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均
ハシブトガラス	595	532	565	375	330	356	245	210	228	70	65	68	70	60	63	1105	985	1048	220.0	138.0	178.0
ハシボソガラス	540	462	502	347	300	324	212	176	195	60	45	53	65	57	61	1065	910	985	194.0	114.0	150.0
ミヤマガラス	495	436	468	336	300	312	185	160	173	62	50	57	55	45	52	947	882	895	154.0	95.0	
カサハギ	480	400	445	213	180	200	260	200	233	35	30	33	50	43	45	620	515	573	72.0	45.0	59.0
サナガ	385	342	365	138	130	135	230	200	218	28	26	27	36	34	35	428	380	406	21.9	17.6	18.9
*ハシガラス	365	325	347	195	178	187	143	125	135	45	40	43	42	39	41	603	573	594	63.0	38.0	
カケス	340	315	328	173	155	167	154	138	147	31	29	30	41	38	39	520	482	500	42.0	30.0	36.0
ムクドリ	243	225	238	135	123	129	70	63	68	27	24	26	31	27	30	412	383	404	26.0	18.0	23.0
コムクドリ	198	183	192	110	102	105	54	48	51	17	15	16	26	23	25	328	303	318	18.0	12.0	14.0
シメ	192	179	185	108	95	105	58	52	55	21	19	20	22	20	21	325	302	314	17.0	12.0	14.0
イカル	235	220	228	115	106	111	86	80	82	24	22	23	25	22	24	342	320	332	23.0	16.0	19.0
オホカハラヒワ	162	146	155	92	81	87	65	55	61	12	10	11	20	17	18	277	250	265	8.2	6.1	7.0
コカハラヒワ	144	125	135	84	75	78	53	42	48	12	10	11	17	15	16	237	205	222	6.6	4.5	5.3
マヒワ	130	117	124	75	71	73	50	43	47	11	10	10.5	15	13	14	229	206	218	4.3	3.0	3.6
ベニマシコ	158	145	152	72	65	67	75	67	71	8	7	7.5	18	16	17	216	200		5.6	4.1	4.7
ウソ	161	148	156	88	79	85	67	60	64	10	9	9.5	17	15	16	266	245	257	7.9	5.7	6.7
*オホマシコ	180	162	173	95	87	91	74	65	70	12	10	11	21	19	20	285	257	274	8.9	5.8	7.6
*イスカ	186	170	180	100	90	96	70	60	65	19	16	18	19	17	18	290	265	281	11.8	9.0	10.4
アトリ	170	148	161	98	85	93	70	58	65	14	12	13	20	18	19	275	239	254	7.6	4.7	6.3
スズメ	148	135	144	75	65	68	57	50	53	12	10	11	18	16	17	234	213	227	7.0	4.8	6.0
ニウナイスズメ	144	131	139	75	67	70	52	46	50	12	11	11.5	18	16	17	228	208	220	6.8	4.7	5.6
ミヤマホシジロ	164	147	156	78	70	74	74	63	68	12	10	11	20	18	19	218	197		6.3	4.4	5.3
アラジ	163	151	158	74	70	72	70	64	66	12	11	12	22	18	20	225	208	221	6.7	4.8	5.7
ノジコ	148	135	142	74	65	68	60	52	56	11	10	11	19	17	18	215	196	206	5.8	4.4	4.9
ホシジロ	168	158	165	81	71	76	75	70	73	12	10	11	20	18	20	245	230	240	7.0	5.2	6.1
ホシアカ	165	148	160	78	68	73	70	60	65	13	10	12	22	20	21	234	213	231	7.0	5.1	6.1

現在の図鑑のほとんどが、この測定値を引用している

榎本佳樹 野鳥誌掲載論文等一覧

昭和9年(1934年)5月～昭和19年(1944年)9月

野 鳥		巻数	号数	頁	発行年	備 考
野外研究	その他					
1 鳥類の鳴聲に就て		1	5	40	S9(1934)	
2 大阪市附近の渡り鳥		1	6	85	S9(1934)	
3 コアジサシの習性		1	6	61	S9(1934)	
4 ホトギスの夜間啼鳴に就て		2	3	6	S10(1935)	
5 ゴジフカラの鳴聲		2	5	10	S10(1935)	
6 フクロウの鳴聲		2	6	4	S10(1935)	
7 ブッポウソウとコノハヅク問題		2	8	65	S10(1935)	
8 ヨタカの鳴聲		2	12	18	S10(1935)	
9 巨椋池の鳥類観察		3	3	34	S11(1936)	
10 鳥類思出記(一)		3	7	23	S11(1936)	
11 鳥類思出記(二)		3	10	44	S11(1936)	
12 鳥類思出記(三)		3	11	29	S11(1936)	
13 鳥類思出記(四)		3	12	32	S11(1936)	
14 鳥と家屋		4	1	52	S12(1937)	
15 蕃殖前後の習性二三		4	5	35	S12(1937)	
16 吉野川大臺ヶ原の見聞鳥類		4	8	64	S12(1937)	
17 天王附近の鳥類視察		4	9	21	S12(1937)	
18 鳥類思出記(五)		4	11	7	S12(1937)	
19 鳥類思出記(六)		4	12	11	S12(1937)	
20 淀川河口附近本秋の鳥類		4	12	28	S12(1937)	
21	ヲバシギを食べたトビ	4	3	3	S12(1937)	
22	野外でベニビタイキンランチョウ	4	4	15	S12(1937)	
23	大阪ヘツバメの初渡来	4	5	72	S12(1937)	
24	大阪住吉浦通信	4	5	72	S12(1937)	
25 鳥類思出記(七)		5	2	15	S13(1938)	
26 鳥類思出記(八)		5	5	5	S13(1938)	
27 鳥類思出記(九)		5	6	52	S13(1938)	
28 大阪東北方山田池附近の鳥類		5	3	40	S13(1938)	
29 グンカンドリに就て		5	4	3	S13(1938)	
30 寒中のツバメ		5	4	19	S13(1938)	
31 クマタカ飛翔時の野外識別		5	8	1	S13(1938)	
32 樺太の鳥界一瞥		5	10	72	S13(1938)	
33	イソシギとハヤブサ	5	1	8	S13(1938)	
34	トビとアラサギ	5	1	9	S13(1938)	
35	堀田氏祖父龍之介翁の遺作を見て	5	12	49	S13(1938)	
36	京都桂川に越冬燕現る	5	3	43	S13(1938)	
37	住吉浦近況	5	12	48	S13(1938)	

38	動物園で見た遠地の鳥		6	1	139	S14(1939)	
39	イヌワシの野外識別其他		6	2	18	S14(1939)	
40	ノスリの野外識別		6	3	25	S14(1939)	
41	チウヒ及びハイイロチウヒ		6	4	14	S14(1939)	
42	隼類並に蒼鷹類の野外識別		6	6	17	S14(1939)	
43	ワジロワシとオホワシ其他		6	7	7	S14(1939)	
44	サシバ・ハチクマ・トビ・ミサゴ		6	8	15	S14(1939)	
45	鶺鴒千鳥類野外識別(一)		6	9	2	S14(1939)	
46	鶺鴒千鳥類野外識別(二)		6	10	22	S14(1939)	
47	鶺鴒千鳥類野外識別(三)		6	11	60	S14(1939)	
48	鶺鴒千鳥類野外識別(四)		6	12	32	S14(1939)	
49		仲哀天皇陵・住吉浦通信	6	2	72	S14(1939)	
50	鶺鴒千鳥類野外識別(五)		7	2	53	S15(1940)	
51	鶺鴒千鳥類野外識別(六)		7	5	19	S15(1940)	
52	鳥類思出記(十)		7	8	20	S15(1940)	
53	日本アルプス一部の旅		7	11	66	S15(1940)	東天井嶽附近の榎本・堀田・長久三氏の写真
54		書展の鳥の絵	7	5	57	S15(1940)	
55		北アルプスだより	7	8	166	S15(1940)	
56		東天井嶽附近の榎本・堀田・長久三氏	7	11	66	S15(1940)	
57	鳥類思出記第十一(満州)		8	2	132	S16(1941)	
58	雨の徳澤行		8	11	58	S16(1941)	
59		上高地より	8	9	2	S16(1941)	
60	鳥類思出記第十二(満州)		9	1	4	S17(1942)	
61	鳥類思出記第十三(満州)		9	3	12	S17(1942)	
62	鳥類思出記第十四(満州)		9	4	15	S17(1942)	
63	鳥類思出記第十五(満州)		9	5	51	S17(1942)	
64	鳥類思出記第十六(阿讃地方)		9	6	9	S17(1942)	
65	鳥類思出記第十七(阿讃地方)		9	9	5	S17(1942)	
66		大阪支部例会での一話	9	8	104	S17(1942)	
67		野鳥の会の回顧	9	8	76	S17(1942)	※直筆原稿撮影済
68	榎本佳樹氏古稀記念特集	経歴抜粋記	9	10	5	S17(1942)	50頁にわたる特集
69	鳥類思出記第十八(阿讃地方)		10	2	19	S18(1943)	※直筆原稿撮影済
70	鳥類思出記第十九(阿讃地方)		10	3	5	S18(1943)	※直筆原稿撮影済
71		鳥のおかげ(上)	10	4	46	S18(1943)	
72		鳥のおかげ(下)	10	5	45	S18(1943)	
73		鳥のおかげ追補	10	9	77	S18(1943)	
74		山口勝一氏を憶ふ	10	6	40	S18(1943)	
75		「野鳥」の廃刊を惜む	11	2	95	S19(1944)	終刊号

野鳥誌掲載論文（短報などを含む）は、計75本にもなる

鵺・千鳥類野外識別

榎本佳樹

總説

一、鵺・千鳥類一般特徴

大きさ

ホウロクシギとダイシャクシギの二種は、我國の鵺・千鳥類中最大の種類で、共にハシブトガラスよりも大きい。

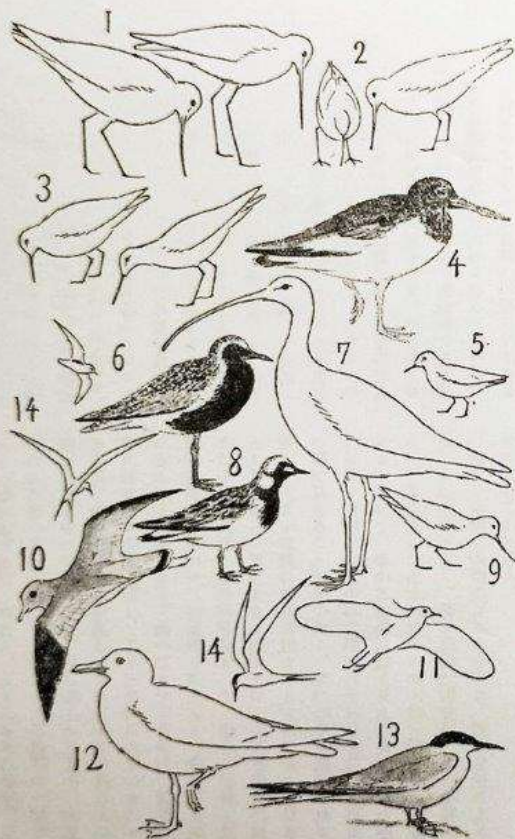
いが、鵺類中でそれ等に亞ぐチウジャクシギは、ぐつと大きさが下つて、ハシブトガラスと鳩（イヘバト）との中間位となり、又千鳥類中の最大種ミヤコドリは、チウジャクシギよりは大きい、ハシブトガラスよりは著しく小さい。而して他の種類は、鳩よりも餘程大きい位のものから、鳩大、鳩よりも小、鶉（根鳥）よりも大、鶉大、鶉よりも小、鶉大等種々になつてゐて、それ等の中の最小種トウネンの小形個體はスズメ位しかない。従つて鵺・千鳥類では、ホウロクシギとダイシャクシギと

まゝ續けざるに食することなく、矢張り鵺類と違つた點が認められる。これは我國で最も普通のダイゼンとキアシシギと位について、比較觀察を試みたら判ることである。

キョウジシギとミヤコドリは、採餌動作にそれぞれ著しい特徴を持つてゐるが、詳細に觀察しなければ判らず、普通の場合、殊に遠距離では、千鳥式でなく寧ろ鵺式に見えるので、採餌動作だけによつては、千鳥類と思

である。

○ 千鳥類略圖説明 1 オホソリハシシギ（左）とラグロシギ、2 オホソリハシシギ（右、側面）とチウジャクシギ（左、此方同）、3 キアシシギ（右、小形個體）とハシシギ（左、大形個體）、4 ミヤコドリ、5 トウネン、6 翼羽のダイゼン（背景は飛行中の多羽ダイゼン）、7 ホウロクシギ、8 キョウジシギ、9 ソリハシシギ、10 飛行中のケリ、11 同タガリ、12 ウミネコ、13 アササシ、14 飛行中のコアササシ。1、2、3 はそれぞれ略同格尺、其他は格尺不同。



シギ・チドリ類の野外識別方法について、昭和14年9月号から6回にわたり「野鳥」誌に連載

大阪支部例会での一話 抜粋 「野鳥」1942年（昭和17年8号）

…長い年月の間に、我国鳥類の激減振りを实地目撃して来た私は、鳥類保護の必要を、人の何倍も切実に感じていた所へ、一満州人の「日本人が渡満を始めてから急に鳥が少なくなった」の一言を聞いて、それが事実であることも確かめたことがあるので、今度の南方共栄圏内に包含されている各地が、世界的に有名な程、鳥類の豊富な所ではあるが、自然のままに任せて置いたら、今から十年も経たぬ内に、日本内地の或る地方の様な「無鳥郷」とでも云わねばならぬ程度の、殺風景極まるものに、なってしまひさうに想われるのである。

（中略）

要するに、（一）建設に伴う破壊を最小限に止める様努力すること（二）「当分保護の必要はない」と云う楽観的気分に陥らない様にする。こと。（三）研究の美名を楯として、鳥や卵を乱獲し繁殖地をじゅうりんすることは絶対に禁止すること。（四）一般狩猟者による乱猟を厳禁すること。（五）「今からでも遅くない」「ぼつぼつ保護の方法を講ぜねばならぬ」は、共に時機遅れであると思わねばならぬこと。（六）少なくとも三年の内一年を絶対保護年とし、特に保護の徹底を図ること等が必要であると思う。

榎本佳樹氏古稀記念特集

目次



観覧

榎本佳樹翁近影
住吉浦に於ける榎本翁

平岩 廣 照 操 口 繪

虎 鷲 の 鳴 く 日
か る が も に 就 て

久野賢太郎
隅田葉吉

談綺寮観

土堤に横穴を穿つた雀の巢
サンコウテウの受難
キセキレイ、カヘル、クモ

三島久人
土岐貞友
山縣深雪

板橋區練馬にイハツバメ……………河野 漢次(三)

わたくしの思ひ
恩師の古稀を祝ふ
榎本翁管見

山崎静子
岡田 稔
中西悟堂

榎本氏よりの近信……………アヲサギ藩邸の大御様・佳樹(七)
榎本佳樹翁古稀記念寄附募集……………(一〇)



野

鳥

第九巻・第十號 目次

表紙・扉及目次カット

小杉 放庵

榎本佳樹氏古稀記念特輯

経歴 拔萃記
理想的生態學者
榎本佳樹翁あれこれ
榎本佳樹翁(特)
鳥學界の至寶榎本佳樹翁
榎本先生の記
榎本先生に従つて
榎本先生の古稀を祝して
榎本佳樹先生の片影(追憶)

榎本佳樹
川村多實二
山口勝一
中西悟堂
安部幸六
平松道夫
藤原廣藏
堀田光鴻
山崎静子

榎本先生に従って 藤原廣蔵 (抜粋)

「一億人の日本人中、鳥類愛護の必要なことに気についている人は、多くとも一千人位」で「保護に努めなければならぬと云う考えを持っている人は、多分百人にも達しないであろう」と常に嘆いて居られる先生である。

狩猟等による乱獲、採卵等は勿論のこと、各地の干拓や開拓、あるいはいわゆる害鳥駆逐等に関し、鳥類保護ないし絶滅防止上、独特の御持論があって、言葉に文章に、機会ある毎に鳥類愛護の要を声高く説いて居られる先生の姿は「鳥類に関する研究、鳥類愛護の思想普及」を以て目的とする日本野鳥の会としても、全く典型的な存在と云ってよいだろう。

尚、余技として先生は擬声が仲々お上手である。アヲバヅクを寄せる位はお茶の子で、キジバトの鳴声は有名なもの、いつか大阪支部の探鳥会で岩湧山に行った時、未明からの雨模様で鳥声少なく、先生、退屈凌ぎに、アカセウビンを真似て、「こういう時に本当にこれが聞けたら仲々乙なものですがなあ」と半ば独り言の様に云って居られたところ、意外にも数刻後、それまで岩湧では全く予期されなかったアカセウビンが、本当に鳴きだしたのである。この時ばかりは、先生手を打って喜ばれた事を覚えている。

4 榎本佳樹の見たシギ・チドリ

- 「大阪市附近の渡り鳥」 「野鳥」1巻6号 1934年（昭和9年）6月 から
- ・キアシシギ 春秋共に一箇所では300羽以上の群を見ることは珍しくない。
ムナグロ、キョウジョシギ 一箇所では200羽以上
ツルシギ 一箇所では400羽以上
チュウシャクシギ 一箇所では5、60羽（春秋同数）
オオソリハシシギ 一箇所では200羽以上（秋に多く春に少ない）
 - ・渡来数の中程度なのがハマシギ 一箇所では30余羽、トウネン5、60羽、
メダイチドリ 30余羽、コチドリ、シロチドリ等
 - ・少い部に属するのは
ダイゼン30余羽、ダイシャクシギ、ホウロクシギ混合10余羽、
ソリハシシギ3、4羽、ミユビシギ30余羽、オグロシギ14、5羽、
アオアシシギ6、7羽、アカアシシギ13、4羽、オバシギ4、5羽或年40羽

- 「淀川河口附近 本秋の鳥類」 1937年（昭和12年）から
- ・ホウロクシギ10羽余、ダイシャクシギ30羽余、
オオソリハシシギ200羽余、オグロシギ20羽以上
- 近年大阪附近の鷺・千鳥の棲住地が激減して、同所の狭小な一地域だけが只一箇所、風前の燈火の形で残っているので、従来数箇所へ渡来していたものや、或はそれ等の後裔（こうえい）者等が其處へ寄集って来たと云う様なことも無いとは限らぬと思ふ。

記事・論文	掲載誌	備考
1 高野山ニテ見タル冬季ノ鳥類	鳥 1(4) 1917 p.39-39	
2 高野山ニテ獲タルおほみづなぎどり	鳥 1(5) 1917 p.74-77	
3 高野山の一年	鳥 2(7) 1918 p.118-123	
4 四國地方に於けるツバメ類の『渡り』並びに習性等に就て	鳥 2(8) 1919 p.156-157	
5 イヌワシの飛翔に就て	鳥 3(12-13) 1922 p.72-76	
6 汽車の窓より	鳥 5(21) 1926 p.41-47	
7 奈良京都方面鳥類一覧	鳥 5(25) 1928 p.453-462	附記 淀川河口部に就て
8 大阪で見たエリグロアジサシに就て	鳥 6(26) 1928 p.38-40	
9 大仙陵附近のサギ類偵察	鳥 6(26) 1928 p.40-43	
10 再びエリグロアジサシに就て	鳥 6(28) 1929 p.160-167	
11 高野山のコシアカツバメに就て	鳥 7(33-34) 1932 p.280-287, PLVI	

【当時の大阪湾岸の状況】

- ・ 淀川河口部に就て 「鳥」 5(25) 1928年(昭和3年) 奈良京都方面鳥類一覧 附記

淀川河口部と云っても随分広い区域に亘って居て、其南部は大阪港の主要部であり、中部は北港海水浴場や桜島工業地のある所で、北部は中部のすぐ北から新淀川の広潤な河口を含む地域となって居る。此北部には新淀川河口の南に干潮の際に現れる洲があり、其東内方に稍広い沼地の萱原があって、更らに其東内方に砂質の畑地がある。それから新淀川の両岸堤防の外側も萱原や草地になって居る。是等の場所は大阪市の一部で、現今拡張されつつある市街地の人家が東方数丁の所まで迫って来て居るから、遠からぬ内に、住宅や商店、或は工場などが建ち並んで仕舞ふことであらう。

右の砂洲と萱原とがshore birdsやmarsh birdsのしばしば来たり、又或る種類の繁殖する場所で、此位の所は全国到る處に幾つもあり、且つ又理想的な鳥類繁殖場や集合地でもないが、雑踏喧噪極まる大商工業都市の附近としては、鳥類観察のため比較的価値のある所であるのと、現今は海水浴、魚釣、貝拾ひ等のためここへ沢山の人に来て、大阪市民の遊び場所の一つとなって居る点もあるから、将来も成るべく現状のまま保存してほしいものである。

自分が今迄にここで観察し得た鳥類は
カイツブリ、ウミウ、アオサギ、ササゴイ、ゴイサギ、※ヨシゴイ、コガモ、
カルガモ、トビ、ノスリ、ミサゴ、*ヒメクイナ、*バン、*コチドリ、
シロチドリ、メダイチドリ、ムナグロ、ダイゼン、ハマシギ、
ツルシギ（アカアシシギ？）、アオアシシギ、クサシギ、キアシシギ、
ソリハシシギ、オオソリハシシギ、ダイシャクシギ、ホウロクシギ、
チュウシャクシギ、アジサシ、エリグロアジサシ、カモメ、カワセミ、
*ヒバリ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、
コサメビタキ、ツグミ、ジョウビタキ、ウグイス、*オオヨシキリ、*セッカ、
ツバメ、モズ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、*コカワラヒワ、スズメ、
ホオジロ、オオジュリン等五十二種あって、中で八種はこの地で繁殖するもの
（*あるもの）であるが、尚将来これ等五十余種の他に新しく見聞される種類が
多少あることと思はれる。

和歌山県では南部の方がまだ交通の便がよくないため行って見ないから、
良好な観察地があるかないかわからず、北部の方は鉄道の通じている区域
内にshore birdsやmarsh birdsの観察場所として適当な所がない。それ
で自分は比較的交通の便利な此淀川河口部へしばしば行くことにして
居る。
(終)

附記 — 榎本氏の淀川河口に於けるシギ・チドリ類の御観察は甚だ有益である。此の如く
日本国中の河口の之等の鳥類の渡来に就き地方在住者の御観察を希望する。右の目録中
エリグロアジサシとあるのはコアジサシ非生殖羽又は幼期にては非ざるや（黒田）。

「大阪市附近の渡り鳥」 榎本佳樹 「野鳥」1巻6号 1934年（昭和9年）6月

【当時の大阪湾岸の状況】

- ・淀川河岸其他に葦原があり、畑地、水田、草地等も尚少々残っているので、それ等に住む数種鳥類は多少見られ・・・
- ・大阪湾沿岸の砂濱は、多くの箇所は幅狭く、且つ其背後地には大小の都市町村が殆んど連続していて、淀川とその分流の河口部が昨年までの鶺鴒、千鳥類や鰯刺類の渡来に適して居た外、鳥類棲住のためには殆ど価値のない所ばかりである。
- ・河川は淀川以外のものは短小で水量少なく、河口部に広い砂洲や泥濱の発達したものもなければ、沿岸に葦原や湿地等があって、鴨類や鶺鴒・秧雞類などの渡来に適したものもない。
- ・只淀川は水量豊富で分流も頗る多く、それ等は殆ど全部運輸交通産業等のために利用されているが、それでも昨年までは泥濘地、葦原、砂洲等の中、諸種鳥類の渡来棲住に適した部分が僅少なながら残って居り、又大部分の河水は、一方に於て工業其他による汚濁水を流しているが、他方に於ては大住民地を貫流している関係上、食餌となる物質が饒多なためか、河口部附近の水土には、種々の小動物が多く、従って人口稠密極まる大都会で人出も頗る多いにかかはらず、渡り鳥は割合に澤山来たのである。然るに是等の場所も市街地や港湾の拡張工事のため本年から鳥類の棲住に適しない様になろうとしている。



1928年（昭和3年）の淀川河口部



1928年（昭和3年）の住吉浦



空中写真はマップナビおおさか より



1932年（昭和7年）
の地形図
今から90年前の大阪

その他水鳥の記録

- ・昭和8年8月11日 平林埋立地
コアジサシ 2万羽近い数
- ・昭和8年9月15日 淀川河口
アジサシ 500羽余 + 杭に50羽余
空に30、40羽
北岸の州に3、400羽
沖合には雲のごとく

コアジサシの習性 文末
もしも我国のどこかに繁殖地があるとすれば、それは通常人が接近して卵でも得やすい様な場所に群集営巢するのであるから、特別保護の方法を講ずる必要があると思う。

「淀川河口部へ来る鰺刺類の研究」
榎本佳樹

コアジサシの習性

一歩行は脚の短い割合に速いが、輕快といふ程度のものでなく、且つ歩くことは稀である。

二 飛行間獲物に向つて下降するのは、飛行してゐる方向と同方面にするのが普通であるが、突然側方の水面に獲物が現れた場合には、急に方向を轉じて下降する。

三 飛行中は、脚を下腹部附近の羽毛間に納めて、外部に現して居ないが獲物に向つて下降する時と、地面へ降る直前とは出して居る。

四 獲物に向つて水面に下降した時は、獲物に成功すると否とに拘らず、次に飛上る際、是で水面を蹴る様に見える。これは水面を蹴つて、體の上昇を助けるのかも知れない。

五 飛行中は鳴聲を出すことが少なく、時として喧噪を極めるが、地面や其他へ降りて居る時は、親鳥と思はれる鳥が他から歸つて来た様な時、幼鳥らしいものがビリ、ビリ、と鳴くことのある外、甚だ靜寂で、鳴聲

を出さない様である。

六 一地點に靜止して居る時間は特別の事情さへ無ければ可なり長く時としては一時間以上に及ぶことさへある。而してその時間の大部は羽毛の整理(Preening)に充用してゐる。又廣く(Preening)に充用してゐる。

々水浴をして居ることもあ

してゐる時の動作は(六)の通りであるが、その中の小部分づつが、時々飛び出して行つて、餌を流ればまた元の群へ歸る。

八 地上へ降る外、杭の先端や、水面に浮いて居る木片などにもとまるが水を游いで居るのは、自分が徳島縣に居た頃一度見ただけで、其他では見たことがない。

ことがない。

九 鳴聲 (a) ベイダ (peñā) ト
ウイダ (twi) 等にきこえるは飛行間
に感々出す。(b) ビツ (bit, or pick)
にきこえるものは飛行間に出すが、多
数のものが此聲を出す、恰も澤山の
文鳥が居る様にきこえる。(c) 幼鳥
らしいものが親鳥と思はれるものに對
しては (五) に述べた如く (pīrīrīrī,
pīrīrī) ときこえる聲を出すことがある。

る。(ハ)獲物の多い場所へ集つて
彼方此方と亂れ飛んでゐる時などに
記のベイグ又はトウイグ等の外、盛ん
にペイハ、ハ、ハ、ペイカラカラカ
ラ、又はトウイカラカラカラカ
hah-hah-hah, peikarakarkarkar, or
twikakalakata) といふやうな聲を出
して喧噪を極めることがある。

十 從來觀察の際には、何時も接近が容易であつた。而して銃を發射しても少し時間を經れば、また元居た所へ歸つて來ることが多かつた。此習性は本種の生存上甚だ不利な點であるが、我國の普通狩獵期間には居ることが稀であるのと、鴨類の或種の様に、死傷して居る友鳥の附近へ、自身が同一の運命に陥るのを意とせず集ることが甚しくないのが、まだ幾分の幸であらう。然しながら、若しも我國の何處かに蕃殖地があるとすれば、それは通常人が接近して卵でも得やすい様な場所に群衆營業するのであるから、特別保護の方法を講ずる必要があると思ふ。

(鳥獸彙編第一卷第七・八・九號
『淡川河口部(來る餘刺類の研究)』
榎本佳樹氏稿より)

大阪支部誕生のころ 第2代支部長 藤原廣蔵 記 抜粋

住吉浦は南港埋立工事のなかった時分の木津川の河口と住吉川の河口の合う、今は発電所のある付近で、現在では地形の想像も出来ない程変ってしまった。

春秋のシギ、チドリは勿論、余り人の立ち入らない場所のため、コチドリ、シロチドリ、コアジサシ等のコロニーがあり、その数たるや夥しいもので、その地域に入ると、どれかの巣を踏まずに進むことは困難であった。カルガモ、バン、オオシキリなどの巣も多く、舟を利用すると便利であった。

シギ、チドリは交通と足場などの関係止、大勢の探鳥会には淀川河口へ行くことが多かった。あの辺の地盤沈下の起る前で、干潮時には岸に干潟が出来たり中州が現れたりして、堤防上から楽に観察することが出来た。又、満潮時には堤防の外側に鳥の集る湿地があって、干潮時に堤防上で充分観察して潮が満ちかけると堤防を下りて、その湿地で弁当食いながら待っていると、シギやチドリが続々と集まってくると云う具合で、今のような芥だらけの干潟でなく環境も比較的きれいであった。

淀川河口鵜千鳥觀鳥會 堀田光鴻「野鳥」1939年（昭和14年10号）

65

との事。會員皆様に御案内が出してあるのに今日となつてどうにも出来ない。又どんな風で鳥がもどつて来るかもしれないと心配しながら心臓を強くして、本日決行したのであつた。それで一群の鳥が見える度にホットすると云ふ風であつたが、ここでハタと行きつまつた。何んとかせなければならぬ分相手は立つ鳥であり、實に閉口した。神崎川をこえた沼地の方にはいつも鳥が飛んでゐる様に思ふのだが何分浅るに橋無く、強ひて行かんとすれば上流へ約十七八町上り流橋、又十七八町下らなければならず、このまゝでは何の觀鳥會かと云ふ事になるので最後の意を決し、渡河を強行すべく、やつとの事で舟をたのみ、二艘に分乗して渡河した。此處で二人は漸く安神した。それはムナグロ、ダイゼン、トウネン、ハマシギ等の群を發見出来たからであつ



淀川河口觀鳥の一行

關公一撮影

淀川河口鵜、千鳥觀鳥會

（大阪支部主催）

淀川河口鵜千鳥の會は九月三日の日曜に催した。今日は神戸支部からも小林支部長、裏川、重田兩幹事等十人もの御参加を得、一行廿六人、放送局の猪川氏も見え、一同阪神電車法線「福」停留所で集合、榎本氏を先導とし河口に向つた。河口左の洲にはウミネコの大群、コアジサシが美しく舞ひ、左の畑地にはムナグロ、コチドリが鳴く。榎本氏の御説明をきく。一同野鳥ガイドブック等を出し御研究に餘念がない。目的地河口左の沼地へと急ぐ。意外——ただ静かに眠る青サギ老幼七八羽の外、トウネン、ハマシギ、コチドリ等の少数より見えない。實はこれは榎本氏と小生の非常に心配した點で、この一週間程前の小嵐風で神崎川の波が堤防をこしたさうで、それから鵜千鳥は皆何處かへ行つたのであつた。榎本先生も殆ど毎日（この季節に成つてから約二十回位、それ以上かもしれない）お出でになつたのだが、二三日前突然見えて「如何したものだらう。鳥が皆何處かへ行つてしまつた」

た。一同約三四十分にわたつて種々な方

面から觀察、生態寫眞の關君は御夫人と共に盛んに望遠カメラを動かす。一同關

君のカメラに入り歸途に就いた。途中の河にはカイツブリの靜かに浮ぶ間にイナ

イソシギ、小千鳥、シロチドリ、ミミビシギ、ハマシギ、トウネン、ダイゼン、ムナグロ、中シャクシギ、大ヨシキリ、
参加者氏名（敬稱略）
光畑慈久、關公一、同夫人、藤田文一、桑田鐵也、川崎正、伊藤重、野田幸藏、佐藤喜雄、大島良、藤原廣康、長久友男、房田秀四郎、山口勝一、同夫人、猪川環、岩田正俊外御二名、服部二郎、重田芳夫、小林桂助、裏川大無、大中啓助、同令弟、榎本佳樹、堀田光鴻、（堀田光鴻記）

今日見た鳥
ウミネコ、ツバメ、トビ、セッカ、ヒバリ、カイツブリ、コアジサシ、青サギ、

木津川（大阪）河口の鳥

堀田光鴻

淀川の鵜千鳥にあきたらず、大阪支部の一部は晝食後、榎本、藤原、堀田組で住吉川河口に出かけた。しかし此處も今

年の日照りで沼地は一所にヒビが入り、何にも居ない。ただ獲物は二羽のヒバリシギとカハセミであつた。止むを得ず、

大阪支部春季鶺鴒千鳥探鳥會 堀田光鴻 「野鳥」1941年
(昭和16年7号)

大阪支部で恒例の探鳥會を五月十一日の日曜開催。参加者は神戸支部から小林桂助、桑田鐵也の両氏。大阪支部としては榎本佳樹、丸山廉、藤原廣蔵の三氏と堀田。合計六名である。鶺鴒千鳥は一般の方には餘り興味が無いと見え、回を経る毎に参加者は減少するが、結局はこの六人位が残るらしい。観察した鳥は例年と餘り変わらないが、オグロシギやメダイチドリの美しい夏羽、京女シギの群飛。コチドリやシロチドリの営巣も少々見られた。

午後一同打揃って住吉浦へ、ここでは数百羽居た夏羽のツルシギも北へ渡ったのか二三十羽しか見られなかったが、アオサギ、カイツブリ、カルガモ、バン、オオヨシキリ等もかなり見られ、埋立地ではコアジサシ、コチドリ、シロチドリの営巣を多数見た。特に桑田君はその測定に顔面を紅潮させていた。

榎本佳樹の見たシギ・チドリ 有明海でのエピソード

「鳥学界の至寶 榎本佳樹翁」 安部幸六※「野鳥」9巻10号1942年（昭和17年）

※福岡の野鳥研究家

有明海の干潟に立往生

- ・ 忘れもせぬ前記昭和十二年四月十二日、榎本、森田両氏と都合三人で、縣水産試験場有明支場の船で沖端村（おきのはたむら）の入江を出帆したのは午前七時半であった。鷗・千鳥の群れを追ひながら此地方で一番多く集るといふ、佐賀縣犬井道（いぬいどう）沖に着いた時は早や十時であった。三人ながら双眼鏡を出して頻りに鳥を覗いて居ると、何時の間にか潮はたちどころに退いて、見るみるうちに一面数哩の干潟となってしまう。さあ、船は一艘も動かない。船頭に聞くと晩の九時頃迄は潮が来ない。夫迄は是が非でも待っておふせつけと柳河辨ではっきり答えた時には三人は顔を見合わせ詮方がない。森田博士などは船から降りて泥に泳ぐ飛沙魚でも採集したいと云われていたが、泥は腰を没する程深いので夫も出来ず困り果てた。こんなことになるのならば、今と異り物資豊かな時で菓子など少し買って来たらよかったのに、只食物と云ったら握り飯と各自一個當の茹で鶏卵があるのみであった。

已むなくここに腰を据えざるを得なかった。夫でも頭上には鴨、鵞、千鳥、鷺の類が訪れ、船の前後には鵞千鳥の大群が黒胡麻を散らした如く、蒔いた如く降りては餌を漁り又飛び出し、代る代る来るので、榎本氏は一々其鳴聲に就て、或は飛び方により或は習性から吾々に其種目を説明して下さるので、之に興じて鳥談は益々賑ひ、時間の経つのも忘れて居た。斯くして有明海の陽も雲仙岳の彼方に落ち月明に飛ぶ水禽もあり、談は又はづみ何時しか時間も経過し船底を洗ふ波音に驚き時計を見ると午後の九時少し前であつた。三人胸を撫ぜ、やれやれ之から柳河の宿に帰られると喜んだ。

嗚呼此十一時間こそ記念すべき長時間であつた。夫でも榎本氏の鳥の話に左程に退屈さを感じなかった。而して吾々が鳥類識別上最も厄介とする鷺鷹目、さては此鵞型目に就て斯くも造詣深きかと今更ながら驚歎した譯で、所謂（いわゆる）鳥学界の至寶と称する所以蓋（けだ）しここにありと云う譯である。

元来し船のコースをとり柳河の宿に着いた時は午後の十一時過であつた。旅館の人も海上の事とてとても心配して試験場や警察に尋ねに行ったさうである。

榎本佳樹が遺した言葉

◆大阪府鳥類の将来と保護について(抜粋)

鳥類の将来に関しては実に寒心に堪えないものがあり、大阪府では特にそれが甚だしい様に思われるから、鳥類を愛好する人や、鳥類研究を事とする人等は、鳥類に関する知識に愛護心の普及に努めることを第一の急務とせねばなるまい。

大阪府郷土博物誌 第1編 (昭和9年6月刊) 大阪府の鳥類について
初の大阪府鳥類目録 確認種+確実と推定される192種をリストアップ

- ◆鳥類は国有の宝物である。今の時代に生きている人間だけが楽しんで、その後は絶滅しても差支えないというものではない。われわれが楽しんだと同様にわれわれの子々孫々までも楽しめ、その保護と増殖に力を尽くすことは義務である。

5 生誕150年記念事業について

榎本翁の野鳥の生態研究と愛護運動の足跡を多くの人々に伝え、改めて野鳥の保護について考えてもらう契機に

日本野鳥の会大阪支部 2022年度 活動計画			グループ等名	榎本佳樹生誕150年記念事業実行委員会
活動・取組の名称	榎本佳樹生誕150年記念事業の企画・実行			
主担当者	納家	副担当	塚田、阪上（メンバー募集中）	
活動の概要 経緯など	大阪支部創設当時に野鳥指導員として活躍され、大阪支部から「野鳥便覧」上・下を発行された榎本佳樹さんの生誕150年となる2023年に記念事業を実施する。 2022年度はプレ企画の実施と2023年に向けての準備を行う。 1873年11月5生まれ、2023年生誕150年			
目的・方針 目指す姿	榎本さんの功績を振り返るとともに、野鳥保護への思いやメッセージを改めて広く世間に知ってもらう。大阪支部の歴史や存在を世間にPRすることにつなげる。 2023年度に実施する記念事業 ・野鳥便覧復刻版の発行、榎本佳樹論文目録作成 ・企画展、講演会 会場候補:きしわだ自然資料館 野鳥図鑑の歴史と変遷などをあわせて展示			
今年度の目標 (何をいつまでに どの程度まで)	・榎本佳樹論文目録の作成 資料収集と目録作成作業 ①「野鳥」誌 ②日本鳥学会誌「鳥」 ③金沢ふるさと偉人館(中西悟堂資料) ④高野山中学時代の文献 など ・野鳥便覧復刻版の発行に向けての準備 印刷会社との調整、経費算定 ・クラウドファンディングによる資金調達方法の検討(年内に呼びかけ開始) ・榎本佳樹の足跡をたどる探鳥会の実施(2022年2回、2023年3回程度)			

76年前を再現・・・古市古墳群探鳥会 75周年記念 2013年2月17日

昭和12年（1937年）の2月18日、日本野鳥の会創設者 中西悟堂と大阪支部の指導者であった榎本佳樹が藤井寺市の仲哀天皇陵などを探鳥したことが、昭和12年4月号の「野鳥」誌に「大阪市郊外の半日」という表題で中西悟堂によって報告されている（以下に一部紹介）。当時、中西悟堂41歳、榎本佳樹63歳、まだ仲哀天皇陵周辺は住宅もまばらで、のどかな田園地帯が広がっていた。

仲哀天皇の御陵の濠には二十六羽のマガモがいた。濠の向こう側にいるのを遠くから見ると頭が黒く、背中が白く、この黒白の染分けのように見えるが、水脈をひいてこちらへ近づくと、嘴の鮮やかな黄と光沢のある青緑色の頭とが、色鉛筆で塗らたように見え、離水して飛ぶうしろ姿では、翼を横につらぬく二筋の白い線がくっきりと目立つ。雌雄を数へ分けてみると、いずれも十三羽づつで完全なPairとなっている。浮いている真鴨たちの先頭を切るのは四羽のカイツブリだった。キキキリキリキリリリリという声が時々空気を錐揉みのようにつんざく。

濠に沿うてまがると御陵参拝所がある。石垣をめぐらし、小さい鉄の門をあしらひ、黒松に囲まれているが、そのあたりには葡萄の棚があり、棚の下には豆畑などがある、モズが飛び、ホオジロが鳴き、草がくりの水のほとりからキセキレイが舞立つては、深い波状に飛ぶのであった。又しても雲を背中にトビの帆翔。榎本氏の説明によると、この御陵ではオシドリ、トモエガモ、ゴイサギが見られ、又アオサギが営巣したこともあるそうである。私達は程近い応神天皇の御陵へと向かった。・・・

2013年2月17日、大阪支部75周年記念探鳥会として、偉大な先人が歩いた古市古墳群を訪ねた。50人の参加者が集まり、57種もの鳥に出会えた。支部の歴史に残る意義深い探鳥会となった。



日本野鳥の会大阪支部 古市古墳群 探鳥会 2013.2.17 75年前に中西悟堂と榎本佳樹が探鳥した40種で57種確認



中西悟堂

榎本佳樹

1937年に確認された鳥18種

トビ、カイツブリ、コカワラヒワ、カラス、アオジ、スズメ、モズ、マガモ、ヒヨドリ、ホオジロ、キセキレイ、ヒバリ、アオサギ、ノジコ、コガモ、ツグミ、オシドリ、ビンズイ



むくどり通信
No.225
2013年5月から

榎本佳樹翁

中西悟堂



古稀にならうと、自分の仕事だから
高山深谷も歩けるのだといふ。
真夜中の空を飛躍が過ぎて
自分の仕事だから、がはと起きるのだといふ。
肩書や世の事業には用もないから
始めから背中を向けてゐるのだといふ。
あゝ樹々と、山野に鳥をみつめて五十年
それは市井の舞ではない。

家族が墓から買物行列にも立つ義のすがた。

贅澤な家や庭は必要がないから
一個市井の質素を基す榎本翁。

不潔な取引は性に合はないからしたことがなく
不正直は餘ひだからしない榎本翁。
正しく、清廉に、この世に生き
慕然に、まじめに、天賦の職にしたがふ
通俗の塵を隔てた本氣な生涯！

私は見た。

野服をびつしより濡らす汗も、老節も忘れて
双眼鏡をたどひたと水禽のむれにあてがひながら
眞愛灼熱の砂洲に立ちつくす不老翁の業を。
私は見た。

動搖を兩足でしつかりと支へながら
板めゆく窓外の鳥にひたすら双眼鏡を向ける
電車の中の老眼翁の澄んだ業を。

仕事をもちとしたいから百歳までも生きたいといふ。



寸暇を惜しむから

人まへにひつぱり出されたくはないのだといふ。

致々として、人目につかぬところで

自分の仕事の職を初いできた野の遺賢！

一徹、他念も世の美難物もない

稀代の野外彫刻者の仕事だから

遠いところで、世のためになるのだ。

たつよりと充された生涯の

美しい老年のみどり！

世とたゝかつてきた嵐のなごりが

むしろ悲壯な影をその襟に宿しても

いまは優しくすべてを許す

夕照のあをぞらの水々しさ！

この人を想ふだけで

この世の辛い一日が淨められ、償はれる。

(古稀に寄せて)

中西悟堂と榎本佳樹

悟堂がいかにも、榎本翁のことを尊敬し、大切に
思っていたかがよくわかる詩

「野鳥」榎本佳樹翁古稀記念特集号に掲載されてい
る他、悟堂の詩集「叢林の歌」(昭和18年)にも収め
られている



榎本佳樹生誕150年記念事業へのご参加とご協力を
お願いします

お わ り

(引用、参考文献 主なもの)

: 日本野鳥の会「野鳥」102号 昭和17年11月号

榎本佳樹翁古稀記念 特集号他

藤原廣蔵「大阪支部のあゆみ」1970年支部報NO39、
1971年支部報NO41、1972年支部報NO45